

～ 看護の現場より ～

共立病院訪問診療課担当スタッフ

「ただいま」「おかえり」…。

あたりまえの会話が心地いい。



「皆さんは自分の死について

考えたことがありますか？」

「もし、自分自身が余命を宣告された場合

どこで最期を迎えたいと考えますか？」

看護学生の皆さん、こんにちは！

私達は、共立病院の外来看護師で、訪問診療課を担当しています。
当院では外来業務の中で訪問診療（往診）という役割があります。

訪問診療とは…

一人で通院が困難な方を対象に医師が定期的に自宅へ伺い計画的に治療・看護・健康管理等を行うものです。定期訪問に加え、緊急時には臨時往診や、自宅での看取りのサポート、入院の手配なども行っています。

現在、共立病院の訪問診療管理件数は約 450 名です。

病状や介護環境は様々ですが、住み慣れた地域で、家族とともに最期を迎えたい…

そんな思いに寄り添いながら、医師をはじめ、訪問看護・ケアマネジャー・ヘルパー等、多職種のスタッフと情報を共有しながら訪問させていただいています。



高齢化が進む現代、当院では昨年 82 名の在宅看取りを行いました。

「自宅で看取る」

そう決意され訪問診療を開始しても、病状が変化するたびにその思いは揺れ動くもの・・・



「それが人間」「それが家族」

当たり前の心境の変化です。

そんな揺れ動く気持ちの変化に寄り添い、身体面・精神面共にサポートさせていただくのも、私達訪問診療看護師の重要な役割だと思っています。

「病院か自宅か」ではなく「**満足のいく最期**」とはなにか・・・



今後はグリーフケアも取り入れた、より充実した往診が行えるよう、スタッフ一同心を込めた看護に努めたいと思っています。



～グリーフケア～

人は死別などによって愛する人を失うと、大きな悲しみである「悲嘆 (GRIEF)」を感じ、長期に渡って特別な精神の状態の変化を経ていきます。遺族が体験し乗り越えなければいけないこの悲嘆のプロセスを、「グリーフワーク」と言います。この悲嘆の状態は、心が大怪我をしたような状態ですが、自然に治癒の方向に向かいます。遺族はやがて、故人のいない環境に適応して、新しい心理的・人間的・社会経済的関係を作っていきます。「グリーフワーク」を経ることで、人は人間的に成長するのです。この「グリーフワーク」のプロセスを支えて見守る事が「グリーフケア」です。

看護学生の皆さん！！

看護師は本当にやりがいのある仕事です。

在宅医療に興味のある方は、

是非一度見学に来てくださいね！

Fight !!!



「看護ができるのは、平和な日常があってこそ」

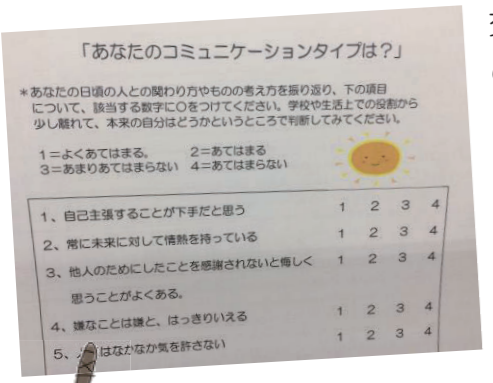
兵庫民医連 看護奨学生交流会 in 神戸市産業振興センター
Date 2017.6.3 (土)

毎年、1年に1度、兵庫県の民医連奨学生が集まり、学習し交流を深める奨学生交流会が行われます。今年は、学生40名、看護学生委員の職員27名、計67名が集まりました。



「コミュニケーションスタイルから自分のスタイルを知る」

普段の生活で私たちはいろんな人と接し、コミュニケーションをとっていますが、コミュニケーションのとり方のタイプが大きく分けて4つに分類されます。



交流会のスタートに、簡単なテスト項目に答えていき、その診断結果で自分のコミュニケーションのタイプにはどんな傾向があるかを知ることができました。

診断後、自分のコミュニケーションタイプを交えた自己紹介をしました。また、いろんな学校の学生同士で、学校のことや実習の話題などで盛り上がり、現場ナースも交えた交流がたっぷりできました☆

「私は自己診断では「サポーター」タイプだと思っていましたが、診断結果では「プロモーター」でした。自分についての理解が深められたことで、今後の生活で役立てることができればいいなと思いました。」

「先輩から実習や大学の話を聞いたり、現場の看護師さんにも実習のことや訪問看護の話が聞けてとても参考になりよかったです。」

「アニメーション『戦争のつくりかた』を観賞して」

交流会の後半は、「戦争のつくりかた」というアニメーションを視聴し、「今私たちにできることはなんだろう」というミッションを考える時間でした。



戦争や平和の問題は、一見「看護と関係あるの？」と思われるかもしれませんが、人の“いのち”に関わる大事な問題です。これからたくさんの“いのち”と向き合っていくことになる看護師のたまご＝看護学生さんたちと一緒に真剣にディスカッションし、考える時間が持てたこともとても貴重でした。

また、民医連が何を大切に日々の医療活動を行っているのか、看護は何のためにあるのかなどについても学ぶことができました。その様子を少し紹介します☆

「わたしたちの国は『戦争しない』と決めました。でも、しくみやきまりを変えていけば、戦争できる国になります」
(アニメーションの冒頭)

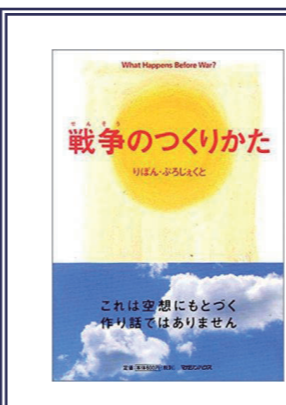


「戦争のつくりかた」アニメーションは、映像作家や音楽関係者ら40人が映像をつなぎ合わせて作られた7分半のアニメですが、大変インパクトのある内容でした。



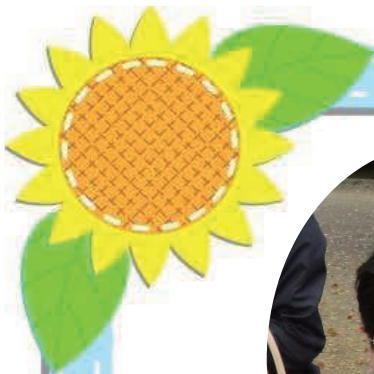
班討論では、「最近新聞やニュースでの内容がとても気になっている」「戦争は知らない間に人の価値観さえも変えられる。何が正しいのかわからなくなる怖さがある」「ホスピス病棟で、日々患者さんの死と向き合っている。病気で亡くなるのと、戦争で殺されて亡くなるのでは、全くわけが違う。」などの意見が出されました。

「今の現状をもっと知ること、勉強すること」「今日学んだことを家族や友達に伝える」「SNSなどを使って広げる」「自分の意見を選挙で1票にしていける」「署名をする」「少人数でなく、大人数でうたえる」など、いま私たちにできることもたくさんの意見が出されました。



アニメーション「戦争のつくりかた」は、この絵本が元になっています。絵本のストーリーのように“日本は、絵本が警告する戦争に近づいている”と危ぶんだある映像作家の呼びかけにより2015年に、約40人が集まって制作された短編アニメーションです。

原作の絵本は、やさしい言葉で、社会がどこに向かおうとしているかが描かれています。この絵本と合わせて、アニメーション「戦争のつくりかた」は必見！さまざまな映像作家さんの映像をつなぎ合わせた作品なので、作り手の思いがそれぞれの手法で詰められています。戦争や平和の問題を自分の問題として考えるきっかけになるとと思います。「戦争のつくりかたアニメーション」で検索してみてください。観られたら、ぜひハガキで感想もお寄せください！



ナースの おすすめ

尼崎医療生協病院
緩和ケア病棟 村下 尚美

みなさんは、なぜ看護の道を選ばれましたか？

色々な理由があると思いますが、看護の道を志したけれど実習や勉強に追われて、目標や目的を見失ってしまうこともあるのではないのでしょうか。

私が看護学生の時には、忙しさのあまり「なぜ看護の道を選んだんだろう」と後悔したこともありました。そんな時にこそお勧めしたい本があります。

それが「紙屋克子 看護の心そして技術」です。

この本はNHKで放映された、「ようこそ先輩」という番組の内容を本にしたものです。「ようこそ先輩」は、「各界の第一線で活躍する著名人が出身校の小学校をたずね、その専門分野と自らの人生を基に、多彩な授業を繰り広げ、後輩の子どもたちに熱いメッセージを送る」という内容の番組です。

「看護の心そして技術」には、意識障害の看護の専門家である紙屋克子さんが、「ようこそ先輩」の番組で出身校に出向き、授業を行った内容が記されています。紙屋さんが実際に行った看護場面の紹介や様々な実験を通して、小学生にもわかりやすいように看護やコミュニケーションについて語られています。

小学生を対象にした授業内容ですが、私は現役の看護師や看護学生にこそ、この授業の内容を知ってもらいたいと思います。相手(患者・家族)に関心を注ぐことの大切さ、看護師がプロフェッショナルと言う自覚を持つことの必要性、そして何より自分たちが行っている看護の意義や素晴らしさを改めて気づかせてくれる内容です。この本を読めば「明日からも看護頑張ろう！」とモチベーションを高めてもらえること請け合いです。おすすめの1冊です！！



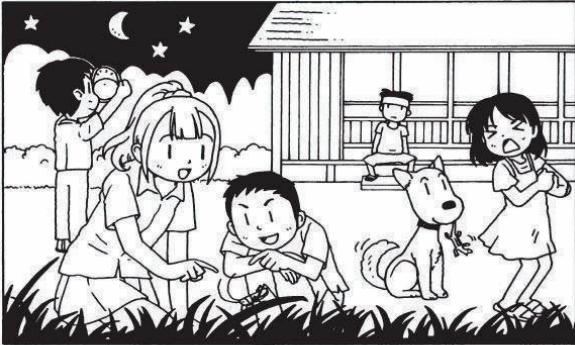
緩和ケア病棟の
マスコット
キャラクターです

Illustration by taemi



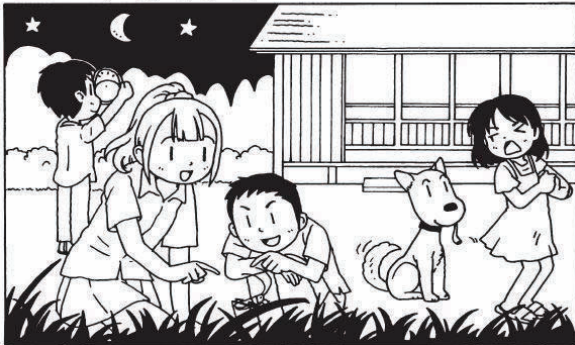
ほっと Station☆

毎日に朝晩は涼しくなってきましたね。
季節の変わり目、風邪に気をつけてくださいね。



7つのマチガイ

【問題】上の絵と下の絵では
7つのマチガイがあります！
どこでしょう？（作・野上和彦）



読者の一言

学内での実習やレポート、テストなど、やる
ことが多くて忙しいです。

ペンネーム（ありす）

前号クイズの答え

1. 前の船頭が持つさおの長さ
2. その船頭のかさ
3. 向こう岸の岩
4. 乗客の帽子のリボン
5. 真ん中あたりの乗客の髪形
6. 後方の乗客の手
7. 後ろの船頭の口

正解者から抽選で 5 名の方に図書カードを
プレゼントします。（返信ハガキをご利用く
ださいね）



紙面リニューアル計画中！

より読みやすく、ためになる紙面をめざしてリニューアルを計画中です。
「こんな記事が読みたい」「こんなことを学びたい」・・・ご意見をお寄せ下
さい。





BOOK 紹介

看護10ストーリーズ

輝くいのちの宝石箱

この本は、患者さんの生き抜く生命に寄り添い、「何ができるのか」と日々悩みながらも人間発達の可能性を信じ、仲間とともに働きかける看護実践を通して人間のすばらしさを学び、またひとりの人間として成長していく看護師の姿を描いた看護の物語です。10のお話の中から1つのストーリーのエッセンスをご紹介します。

植物状態からの回復を「情熱」で支え

～10ヵ月の看護をあきらめず～

埼玉県三郷市 みさと健和病院 川上貴子さん

みさと健和病院でレントゲン技師として働いてきたYさんが、交通事故で脳挫傷と外傷性くも膜下出血でねたきりの状態となり、みさと健和病院に在宅療養を目的に転院してきました。転院当初は、気管切開、胃ろうでの栄養管理と、「こんな状態の人をリハビリで、家に帰るところまでもっていけるだろうか・・・」と、見通しも展望もほとんどないなかでのスタートでした。



母親のなんとか息子を回復させたいと願う心情に打たれ、スタッフ一同リハビリに関わったところ、植物状態だったYさんの手が1ヵ月もたたないうちに自力で動かせるまでになっていったのです。その後は、車いすに座る訓練や、口から食べる訓練が始まり、徐々に人間的感情も取り戻すことができましたが、事故の後遺症で、過去の記録にばらつきがあるなど高次脳機能障害が残りました。

しかし、あきらめずにリハビリを続けた結果、転院から10ヵ月後自宅に帰ることができました。Yさんが入院中がんと宣告された母親は、Yさんが退院してから1ヵ月後に息を引き取りました。Yさんは母親が死んだことも、永遠の別れが悲しいものだということもわかりませんでした。

それから4年後、Yさんは精神障害者地域活動支援センターに通っています。そして、みさと健和病院のレントゲン室に週何回か出向き、書類に印を押したり健康診断の案内を封筒に入れるなどの事務的な仕事をしています。



看護は“情熱”それは、“パッション”のような“熱意”でもあり同時に、看護師自身が気持ちを込める“情”でもあります。絶対にあきらめない気持ちがみんなに伝わり、病院全体の取り組みになりました。川上さんは、「看護って、やっぱり素晴らしいです。だからやめられないんです！」と語っています。

この物語の他に、末期がんで入院している患者さんを、ストレッチャーに乗せてお祭りに連れていってしまう・・・何のためにそんなことをするの？雲の上にある患者さんの家まで、熊やイノシシが出るという山の中の藪道を上って看護に通い続ける・・・なぜそこまでして看護を届けるの？

そんな一見、常識では考えられないような看護ができる理由がこの本には書かれています。

「看護とは人と人が触れ合って生まれるいのちの宝石箱」ということを、この本は教えてくれます。ぜひ、手にとって読んでみてください。

本の泉社 全日本民医連 編
矢吹 紀人 著
定価：1000円＋税

